

その先生が五年生の担任になった時、

一人、服装が不潔ふけつでだらしなく、

どうしても好きになれない少年がいた。

中間記録に先生は

少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生からの記録が目止まった。

「朗<sup>ほが</sup>らかで、友達が好きで、人にも親切。

勉強もよくでき、将来が楽しみ」

とある。

間違いだ。他の子の記録に違いない。

先生はそう思った。

二年生になると

「母親が病気で世話をしなければならず、

時々遅刻する」

と書かれていた。

三年生では

「母親の病気が悪くなり、疲れていて、

教室で居眠りする」

三年生の後半の記録には

「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」  
とあり、

四年生になると

「父は生きる意欲いよくを失い、アルコール依存症いぞんしょうとなり、  
子どもに暴力をふるう」

先生の胸はげに激しい痛みが走った。

だめと決めつけていた子が突然、

深い悲しみを生き抜いている生身なまみの人間として

自分の前に立ち現れてきたのだ。

先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をやるから、

あなたも勉強していかない？

わからないところは教えてあげるから」

少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、

少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に行った。

授業で少年が初めて手をあげた時、

先生に大きな喜びがわき起こった。

少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。

少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。

あとで開けてみると、香水の瓶びんだった。

亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。

…  
う  
く

